

池田さんの潔癖

秘書官として二度仕えた池田首相の人物論で
昭和四十二年五月一日に執筆。『硯滴』に
初出。のち『池田勇人先生を偲ぶ』にも収録

池田さんは私にとつてあまりにも近い人であつた。それだけに「池田さんの人間像」を映してみようと考へても、どの面を捉へて書いたらよいか、その座標のとり方に先ず困つてしまふ。仕方がないからあまり世間に知られていない池田さんの一面に、レンズを向けてみることにする。

池田さんは、人に対し好悪の情がハッキリしすぎるくらいにハッキリしていた人だつた。いったん嫌悪の情を覚えると、それからの脱却は容易でなかつた。反対に好感をもつた人には、必要以上ともいえるほどに親切で、自己開放的であつた。私なども好感をもつてもらつていたと見えて分相応以上に恩顧を受けえたのではないかと思つた。

この好悪の情は他人ばかりでなく、きわめて身近な人々にも、同様に発露されていたようだ。帰宅されて夫人が見

えないと、その行先を馬鹿に氣にしてみたり、お嬢さんの結婚についても、理屈では手放さなければならぬことを知りつつ、實際は手放すのがいやさに、色々と文句をつけたものである。揚句の果ては、世話する人とか、相手のお嬢さんまでも敵視するようになったりした。「清濁併せのむ」などという芸当は、池田さんにはできなかった。他者との接触において、潔癖性というアレルギー症をもつていたようだ。その潔癖性は、金の取扱いにもよく出ていた。その献金のもつ鮮度に変神経質であつた。その金が政治的効用をもつものであれば、多少の無理をしても受取るというようなことはなかつた。何を措いてもまずその鮮度を問題にしたものである。

その傾向は、政策に対する態度にも貫かれていた。例えば日本の税制は、どの部分をとつてみても、多かれ少なかれ池田さんの苦吟を経たものであるといえよう。その中には、一貫して税の公平という教条主義が貫かれていた。私は、この教条主義には少なからぬ抵抗を感じてきたものだが、この城砦を守る殿将として、池田さんは大いに奮闘したものである。また自由企業体制を信条としつつも、政府の手によつて、ある種の方向づけや計画性を盛り込むことに、意外に熱心であつた。これも水の流れるに任せようと

する観照的な没我的な態度にあきたらない潔癖性の致すところであったのではなからうか。

晩年、ことに政権をあずかってからの池田さんは、この潔癖性からの脱却をいろいろ工夫しておられたようだが途半ばで逝かれたことは、かえすがえすも残念である。